会議録（概要版）

審議会等の名称	第8回山口市スマートシティ推進協議会
開催日時	令和4年1月19日（水曜日）10：00～12：00
開催場所	防長苑　2階　孔雀の間
公開・部分公開の区分	公開
出席者	松野浩嗣委員、杉井学委員、中川健一委員、濵田泰委員、大田正之委員、永久弘之委員、山本庸子委員、会田大也委員、田中光敏委員、中島和彦委員、鈴木文彦委員、兒玉達哉委員、高田新一郎委員、藤井智佳子委員、田中貴光オブザーバー
事務局	山口市総合政策部スマートシティ推進室
次　第	1　開会 2　会長挨拶 3　議事 （1）山口市スマートシティ推進ビジョン（兼）官民データ活用推進計画の策定について （2）意見交換 4　閉会
議　事	<u>1　開会</u> <u>2　会長挨拶</u> （会長挨拶） <u>3　議事</u> <u>（1）山口市スマートシティ推進ビジョン（兼）官民データ活用推進計画の策定について</u> （資料　1「山口市スマートシティ推進ビジョン（山口市官民データ活用推進計画）の策定について）について説明。） （資料2「山口市スマートシティ推進ビジョン（兼）官民データ活用推進計画（最終案）【概要版】」について説明。） （資料3「山口市スマートシティ推進ビジョン（兼）官民データ活用推進計画（最終案）」について説明。） （資料4「第2期山口市まち・ひと・しごと創生総合戦略の進捗状況について」について説明。） <u>（2）意見交換</u>

	【松野会長】 どうもありがとうございました。少し私の方から補足をさせていただきます。 今の事務局の方から最後に言われたところで非常に大事なところで、市民目線、生活者の視点から入るというところなのですが、資料３の資料本体の４８ページの所を開けていただきますと、DX の考え方というのがあります。それで、緑の枠の中に書いてあるものが、5、6 行上に経済産業省が示した DX 推進ガイドラインがあってその中に入っているDXの定義を行政というか、市民、山口市のバージョンとして作られたもので、これはスマート推進室の方で考えていただいたものです。「社会環境の激しい変化に対応するため、データとデジタル技術を活用して、市民や社会のニーズを基に行政サービスを含めた市民サービスを変革するとともに、行政や民間事業者等において、業務そのものや、組織、プロセス、組織文化・風土を変革し、市民の安心安全や生活の質をより向上させること」ということです。市民や社会のニーズを基にというところが非常に大切です。このページの最後の段落ですが、この取り組みをするにあたって、この DX の考え方を踏まえて、AI や RPA のデジタル技術の導入から考えるのではなくて、生活者の視点を第一に、市民やニーズを基にプロジェクトの検討を行い、そのうえで、対象者や目的に応じて、必要な技術を選択してプロジェクトを実施する、この順番を間違えないようにするということが非常に大事であろうと思います。結構デジタルというと技術の方に目が行きがちで、そちらにとらわれているものも結構多いのですが、ここはしっかりと押さえていっていただきたいというふうに、私は思っております。それから同時に大事なことは次のページをめくっていただいて、デジタル化における注意点、その枠に書いていることは今、説明がありましたが、データの取り扱いです。便利になるということは、それぞれの人が知らないうちに自分の個人データを使われているということです。それが特定できないとその人に指図できませんから、だからこれは必ずセットで考える。だから便利になるということはデータを使うということだから、そこのデータをちゃんと守って、外に漏れないようにして、きちんと、有効に使えるようにするというふうなことをセットで必ず考えるということです。この辺の考え方が根幹になろうというふうに思っております。 それから、それぞれのプロジェクトについてですが、後ろの方に重点プロジェクトがありますが、たとえば 76 ページの所を開けていただくと、豊かな学びを育むプロジェクトとあります。生活者の視点、市民の視点ですから、そもそも誰のためにやる、何のためにやる、そこが非常に大事です。それで下線と網掛けがしてありますが、ここについては、誰のためには、子どもたちです。何のためには、子どもたちが自由な発想で多角的な視点で自らの学びを深めることができるということです。それぞれについて、そのプロジェクトについてこの網掛けと下線が引いてありますので、この部分もしっかり押さえて、進めていく必要があろうかというふうに思います。以上、ちょっと補足をさせていただきました。 それでは、次に、意見交換に入らせていただきます。今の事務局の説明、あと私がちょっとしゃべりましたが、そのこと等についても、何か質問でもよろしいですし、それ

	ぞれこれの全体を見られて、感想とかを述べられていただいても構わないかと思います。では、名簿の順で、杉井委員からお願いします。 【杉井委員】 　議事を見させていただいて、実は前回の素案から、私も意見をさせていただきました。特に私の方からはセキュリティのことについて、以前この場でもお話をさせていただきましたが、セキュリティというのは情報を利用するうえで、欠くことができない考え方ということで、セキュリティに関してまず、指摘をさせていただきました。後の方に、この素案の後ろの方に、図が出ていますが、52 ページ、53 ページの辺りに、CIOとかCISOというような組織図を、CISOをきちんと入れてくださいというようなことを、申し上げました。 　それから、後は松野先生、委員長が言われたように、デジタル化することに関して、3 つの段階があるというふうに委員長に言われて、特にDXの所で、我々の学部でも強く意識をしているのですが、人間中心という考え方、いわゆる Society5．0というものの中に書いてあるのですが、まず人間を中心において考えましょうという考え方です。ちょっと違う角度から、人間中心というと、人間が身勝手に、勝手にいろいろというふうにみられることもあるのですが、そうではなくて、人間が見て使い勝手がどうなのか、人間にとって安全なのか、というようなところで、技術ありきでは、先ほど委員長言われたように、技術ありきではなくて人がどうとらえるのか、どう利用できるのかというところを、中心に考えるべきだというふうに言いました。我々の学部でもそういうふうに、デザイン科学というような学問もやっていることもあるので、そこの根底にあるのも人間中心、という考え方、デザイン志向と言ったりしますけども、そういうところを、少し意見をさせていただきました。 　後はペルソナのところですね。ペルソナをいくつか付けていただいていて、これとてもいいなと、感想ですが、とてもいいなと思いました。具体的に、一般の方が見て、分かりやすいだろうというところで、とても良いなと思いました。一方で、ペルソナの作りを誤ると、すごく大変なことになりますので、ペルソナはすごく重要で、いかに実際の状況を反映したペルソナを作るかというのはとても難しいのですが、こういう形でまとめていただいて、とても分かりやすくなったかな。 　一点、ちょっと気になったと言いますか、これは難しいかなと思いましたが、子育て世代の次に学生ときていまして、若者世代の学生を、代表にしていいのかなとちょっと私も考えました。20 代の働いている若者たちというのもあってもいいのかなという気もしましたが、増えすぎても煩雑になりますので、今回はこれで。後もう一つだけ欲を言うのならば、もっと分かりやすく、市民目線で分かりやすくということをよく言われましたので、何か映像のようなもので、将来こんなふうになりますというようなイメージビデオ的なものがあっても良いのかなということは感想として思いました。以上です。

	【松野会長】 　どうもありがとうございました。ちょっと一つだけ、コメントさせていただきます。 　人間中心の考え方というのは、内閣府が人間中心のAI社会原則というのを出しています。昔から、今使われているAIの技術というのはもう大昔からあるのですが、私も情報科学をやっていますから、それは知っています。だけど、最近になってAIの性能がものすごく上がったので、人間と向こうを張れるくらいになっています。その中で、人間対AIというふうな構図が出てきていて、人間の方はしっかりしないと、AIに対抗、対抗するわけではないですが、そういうふうなことで、最近そこは非常に大きくクローズアップをされているというふうな背景があります。 　では次にまいりたいと思います。 【中川委員】 　中川です。よろしくお願いします。 　ちょっと資料1の部分で、修正というか、補足をしておきたいことがありまして、伝えたいと思いますが、2ページ目の2つ目のセンテンスで、スマートシティの取り組みをし、ではなく、民間事業者が率先して取り組むというふうに、誤った文で伝えてしまったのだと思うのですが、市が主導することは全然悪いというふうに否定しているわけではなくて、民間事業者を含めて参画するというイメージをしておりました。というのは、様々な分野であるとかそういったところにサービスを提供したいという事業者を、最終的にそれをさせるかどうかというのは山口市の最終的な判断かもしれませんが、事業者が主体で、こういったサービスをやりたいのだというところもしっかりフォローをしていく必要がある、そういうふうな形の考え方が必要ではないのかということで、ちょっと申し上げたつもりでしたので、ちょっと補足しておきます。 　それから、資料2の方になりますが、重点プロジェクトのところの4項になります。こちらにいくと、中山間の地域であるとか、都市核の話があるのですが、最終案という資料を見ていると、構成的には都市核と中山間をすべてつないだような絵姿になると思うのです。ということは、中山間とか都市核という、個別にどうするかということではなくて、都市核に良いサービスを入れれば、それは中山間も使えたりするわけなので、そういうふうな連携というかつながりですかね、そういった中山間から都市核も逆にあるでしょうし、そういうふうな山口がコンパクトシティとして都市核も中山間もしっかり連携して、その恩恵を得るのだというふうなメッセージがどこかで出せればいいのかなと見て思いました。 　それからその次、2ページ目になりますが、重点プロジェクト1のところです。こちらはキーワードを大きく二つあると思っていて、ビッグデータ活用だとか、先ほど、松野先生が言われたような、個人情報、個人の話とかいろいろあったのですが、データが宝の山になっているとそれをしっかりデータ保全する、活用するというところで、運営面をどうするかというふうなところも、しっかり考えていかないといけないかなと思いました。そういった意味で、どういったサービスを設けるかというような判断が、そのシ

	ステムをどういうふうにお守していくのかというところが、せっかく住民にメリットになるサービスを提供しているにもかかわらず、それが使えなくなるというのは逆にサービス的にはあまりよろしくないと思っていますので、そういったことも考える必要があるかなと思って、下の重点プロジェクトもそうですが、思いました。 　あと1つは今回、データ連携基盤という仕組みが山口市民の方に対して価値を提供するというふうな考え方は全然賛成ですし、そうあるべきだと思っていますが、内閣府のスマートシティリファレンスアーキテクチャとかを見るとこういったデータ連携基盤を自治体間でつないで、新たな価値を見出すというふうなところが期待されています。なので、山口に住んでいるけれど、ほかの自治体とかの情報をうまく恩恵を受けて、例えば旅行の予約なんかもうまくやれるとか、いいものがあるかもしれませんが、そういうふうなかたちで、ほかの自治体とつなぐことによって、広がる付加価値とかがあると思うので、そういったところも何かイメージしていただけるとすごく分かりやすいのかなと思いました。 　最後に一つ、本文中の 99 ページになりますが、デジタル人材の育成というところで、記述いただいております。ここの中に産官学、しっかり連携しながら人材育成をしましょうというふうな絵姿が下に書かれていると思いますが、今、山口県立大でも、将来構想検討委員会の中で、山口県の新たな人材の基礎作り推進講習というのに基づいて、県立大がどのような学生を作っていかないといけないか、社会に輩出しないといけないかという検討をしている中で、デジタル人材の育成をするというふうに明言されていますので、山口大学様だけでなく、そういった市内、もしくは圏域の大学とかと、そういった人材育成というところもしっかり連携していくということも追記いただければいいのかなと思いました。最後のはコメントです。以上です。 【松野会長】 　はい、ありがとうございました。では続いて濱田委員、お願いします。 【濱田委員】 　濱田です。前回の会議で、私の方からは市民のデジタル化の状況を把握するということで、ある程度されたらいかがでしょうかという提案をさせていただきました。ご説明もいただきまして、趣旨は、もう一回私の方から重ねてお話をすると、私が思いますデジタル化というのは、デジタル化の基盤と言いますか、基本というのは、世界共通、全国共通のテクノロジーを使う、活用するということだと思います。ですから、山口市独自に何かを作るとか、独自にデジタルの技術を活用して作り上げて、構築していくということとは少し違うのではないかと。そうすると首都圏とか、他地区のデジタル化と山口市の違いというのは、やはり地域の人が今現状どのように使いこなせているかとか、あるいはどういう課題、山口ならではの課題を解決するのに困っておられるのかというのが、明らかにならないとデジタル化というのはあまり意味がないと、僕は思う。そんな意味で、是非これから進めていく中で、そういう山口市民のデジタル化にお

	ける立ち位置がどこなのか、できればそれを指数化できればもっといいのですが、簡単に言うとスマホの普及率一つでもそうですし、地域によっても違いますし。そういうのがある。ひとつの指標になっている。一番の指標。そこのところをあまり把握せずにデジタル化ということは、1年2年のうちにどう変わっていったか、どう便利になっていったのか、分からないだろうと思います。だからそれを踏まえてアンケートと言いますか、調査といいますか、そういったものは、欠かさずやっていただければなと思います。お願いいたします。 　今回いただきました資料の中で、疑問点がちょっと3つほどある。一つは主語が、先ほどから何度か出ていますが、生活者という言葉、市民という言葉と社会という言葉がある。社会と市民の違いというのはこの中でどう違うのだろうと思いますし、生活者と市民の違いはどこにあるのかというふうに思います。なんとなくニュアンスなのだろうけど、できればそこは何か統一なり、整理なさったほうがいいのかと思いました。 　あともう一つは、産学公民連携という表現がある。連携事業者として、企業のリストが今、出てきていますが、この今回資料の中で、申し訳ないのですが、大学の存在、大学の関わり、まず山口市にある大学の知見といいますか、あるいはその辺がもう少しあるといいなとちょっと思いました。関わるということ自体は確かでしょうけれど…。山口市というのはそういう特徴の一つだと思いますし、ならではの何かがこうあるという。それとも一つは、今も出ましたけれど、周辺市町との連携、市町の連携、そこのところ、安全を守る、災害を守るという話もそうですが、そこの連携というのは、言葉の中になかったと思いますので、そういったものも必要ではないかなと思いました。以上です。 【松野会長】 　はい、どうもありがとうございました。大学のことを今言われたので、今回の重点プロジェクトといっても非常に広範囲です。うちの大学、総合大学ですので、どのプロジェクトも結構そこそこ関われるようなところもあろうかと思うので、その辺はまた山口市さんと十分関われるところはやっていくような方向でやれたらどうかなと個人的には思っております。では次に大田委員、お願いいたします。 【大田委員】 　このスマートシティ推進ビジョンにつきましては、だれもが生き生きと豊かに暮らせる持続可能なまちということで、市民生活という目線から網羅的にバランスよくできていくものと思っております。その中で、一点だけ、申し上げておきたいことがありまして、というのは、今日本は半導体不足で、大変な、家電もなかなか十分入ってこない時代になってきておりまして、半導体の専門家の方に、なんで日本は今、自力で半導体ができない時代になったのでしょうかと聞いたところ、それはアナログを大事にしないからという返事が返ってきました。やはり、デジタル、デジタルと言いますが、基礎の

	部分ができていない。日本は。やはり高等教育もそうですが、まずアナログを大事にして、そういった基礎を大事に、次のステップへ行く。という、いきなりデジタル化というのより、そういった基礎のプロジェクト６にもあるのですが、しっかりと小さい初等教育の時からしっかりとデジタル、デジタルというのではなくて、アナログのまず、入口のところからしっかりと学んでいただく、そういった仕組みも社会のなかで必要なのではないかなという感じがしましたので、申し上げます。以上です。 【松野会長】 　どうもありがとうございます。それでは、永久委員お願いいたします。 【永久委員】 　JA の永久弘之と申します。よろしくお願いいたします。 　今回、スマートシティ推進協議会、招いていただきまして、いろいろな分野の方とご協議等をしておりました。当初、私もデジタルについては大変不得意な分野でしたので、皆さんがおっしゃることがなかなかピンとこない、または理解できない部分が多々ありました。しかし、デジタルを通じた社会の可能性については、ずいぶん未来があるものだなということが、この度、会議に参加させていただきまして、私の個人的な見解、思うところです。 　しかしながら先ほど、市民目線とか生活目線という話がありましたが、やっぱり山口市民が実際どうやって活用できる場にたどり着くのか、その方法は簡単な方法でないとなかなか難しい部分があるのではないかと思います。私ども、農業分野においてはご存じのように対象者がずいぶん高齢化しております。その農家の方々とお話しする中で、デジタルを活用していこうとすると、もう、デジタルの話が出ただけでもうあきらめの極致に入ってしまって、それより先に進もうとしないといった場面がどうしても見受けられます。ですから、そういった生活の豊かさを広げるために自分が必要としているものに対して、どのように、何回程度のアクセスで近づいていけるのか、そういった分野が一つ一つ確立して行けると、市民のすべての方が、いろんな方面について、ご利用いただけるのではないかなとそのように感じています。 　それと合わせまして、農業分野の方は、スマート器具の導入等によりまして、ずいぶんやり方等も変わっておりますが、山口市、まだまだ、スマートの機械が導入するできる地域と、または個人の力量、または意地によって、かろうじて農地を維持しているという場面と、農業も様々な対応分野を持っております。私ども、JA としてもいろいろな組合人、農家の方に、伝達するのに大変苦労しているということを先日の発表会で言わせていただきましたが、昨年の今頃、皆さん記憶の中では、新しい方もいますが、実は阿東でコロナのクラスターが発生しまして、JA の職員もその一部となったわけですが、その状況を阿東の農家の方に伝えるのに、一番有効だった方法が防災無線でした。防災無線を通じて、阿東の全地域の方に、今、こういったことが生じて、JA の店舗を閉めさせていただいておりますといったところをご案内したところですが、そ

	ういったデジタルを活用しながら、アナログの威力も活かしながら、生活をしていく必要があるのかなというふうに思いました。 　28 ページに将来の人口像とが記載されておりました。これから先、地域によってずいぶん人口減少が起こる地域も多々あるかと予想されておるかと思います。今までは村、地域、近隣住民で、何とか皆さん力を合わせて生活環境を整えてこられた状況ですが、このコロナによって、生活環境も随分変わって、もしくは、地域の存在自体が大変難しい地域も中には出てくるかもしれませんが、そういったときに、その一助がこのデジタルとなるように何とか市民の皆さんが、使いやすい、入りやすい、そして自分の知識を取りやすい、そんなデジタルの活用ができると市民の皆さんもきっと喜ばれるのではないかと思います。私の感想でした。申し訳ありません。よろしくお願いいたします。 【松野会長】 　はい、ありがとうございました。続いて山本委員、お願いいたします。 【山本委員】 　やまぐち産業振興財団の山本です。私の方から 2 点と思っております。先ほど、松野会長の方からもありましたが、DX の考え方ですが、私どもの事業の中で、DX に関して、私どもは中小企業さんの皆さん方に信用するという役割を持っておりますので、そういった中で、DX についての考え方、それと補助金等も出している事業を進めているわけですが、そういった中で、やはり、ものを導入するほうから入ってしまうということはままあることですが、そのあと、運用になってはいけないということで、後から＊いろいろするというようなケースも、あってはいけないのですが、あるように聞いておりますので、その辺のところはやはり柔軟というか、ここは大事なところだということで、大変共感したところです。 　それに同じように、セキュリティのこと、杉井先生もおっしゃられた部分ですね。知らない間に閲覧をされてしまう状況にあるとか、データが一覧をですね。それはヒューマンエラーもあるかもしれませんけれども、仕組み、システムでそこが回避できるような形で、はなからちゃんとそういう形になっていれば、安心して市民の方もお使いになられるかなというふうに思っております。 　先ほどからもありますように、市民の皆さん方はなかなか、ご高齢の方とかも、デジタルリテラシーというか、そういうところにたどり着いていらっしゃらない方もたくさんいらっしゃるかと思いますので、その辺のところをどういった形で対応が皆さん方にできるかという形、導入していくにあたって、その辺もハードルを下げていっていただくような形の、説明会や説明の仕方とかが必要かなと思います。人材育成のところで、本文から言いますと、98 ページのところで、人材育成プロジェクトというところがありまして、私ども、運用化させていただいております、KDDI 維新ホールの中で、そうしたいろいろな事業が入っております。そういった中で、コミュニティというか、いろい

	ろなデジタル産業人材の育成というところで、また新たな産業とかが生まれていくような形とか、新たなスタートアップになるような形の人材とか、生まれるような形で、これはすぐさまではなく、将来的にそういった事業なりが進めていければ私どもも、是非そういうふうな形で参加させていただけたらなと思いました。以上です。 【松野会長】 　はい、ありがとうございました。続いて会田委員お願いします。 【会田委員】 　山口情報芸術センターの会田です。そうですね、僕自身としては、いろいろ現場で市民を中心にものづくりをしたり、文化的なプログラムを運用しているという立場から言うと、デジタルかアナログかというところもありますが、どちらかと言うと、使いやすくて便利かどうかというところが重要かなと思っております。 　例えばこういう文章の校正だったりとか、意見を反映していくというプロセスにおいても、僕の立場からすれば、普通にデジタル上でドキュメントを公開してもらって、同時編集したほうが、はるかに便利だろうと思ってしまいますが、毎回紙を、こんなにたくさんの紙を印刷されて、手で回すという、これはいかにスマートではないかという話も議論すべきだろうと僕は思っています。つまり、今できることがあります。同時に１個のドキュメントを全員が編集するということが、もはやお仕事でも、市役所使われていると思うのですが、そういったことができる、選択できるのですが、今この文章については選択できない状態で提供されている。これは不便だと思います。選択できるところで、便利かどうかというところのユーザーによって、便利さをチョイスできるということが大変重要かなと思います。これは、ありとあらゆる行政サービスにおいてもおそらく同じことになるはずで、例えば市役所に行って書類に書き込みをしなければならないということが便利かどうか否かとか、もうちょっと言うと、役場の中で取り扱いをする書類のフォーマットとして、便利であっても、それが書き込む側からして便利なフォーマットになっているか否かを含めて、ユーザー側の方の視点が欠けていると、どんなにバックグラウンドがスマートなシステムでも、使いこなせる人が少なければそれはスマートではないということです。 　なので、そういったことを含めて、スマートというふうに呼称するべきかなと思っていて、それは最終的には、最初に松野会長のほうから言われたような、デジタルトランスフォーメーションの一番メインにつながると。後はたぶん須原さん、最後にコメントあるか分かりませんが、エストニアの事例を含めて、ラストワンマイル、エストニアではお年寄り、最初はやっぱりデジタルに拒否感があったわけですが、使い勝手については一人一人向き合って、丁寧に丁寧に教えていったという作業、大変な苦労だと思いますが、あったと思います。それを乗り越えたうえで、全員が使いこなせる、全員が使いこなせているから初めてデジタルトランスフォーメーションのメリットを享受できるという社会になっていく。それを考えると最後の一マイルが非常に重要になっていく。そこ

	の手間暇を惜しまないというふうな覚悟を持って取り組むというのが非常に重要なことなのかと思います。その部分というのも、僕の立場からはコメントとして残しておきたいなと思います。以上です。 【松野会長】 　はい、どうもありがとうございます。続いて田中委員お願いいたします。 【田中委員】 　山口観光コンベンション協会、田中です。私からは 2 点です。 　一つは、これは重点プロジェクトの方で、今後、進めていかれると思うのですが、どういう情報をデータ化していくか、これについてはしっかりと協議が必要じゃないかと考えているのと、それから観光面で申しますと、観光地域づくりのためには、地域の方がおもてなしの気持ちで出迎えていただくような、そういう雰囲気が必要だと思っております。そういう意味で、例えば交流人口の拡大推進であるとか、なぜ必要なのか、それによって、地域が潤っていくのだといったことも、啓発をどんどんしていくようなことも、広報関係もお願いできればなと思いました。私からは以上です。 【松野会長】 　では続いて、中島委員からお願いします。 【中島委員】 　レノファ山口です。どうぞよろしくお願いいたします。レノファ山口はまず代表者が 15 日付で交代しまして、今後新体制の元、やってまいりたいと思いますので、引き続きよろしくお願いいたします。 　ちょっと、皆様方がご意見をしている中で、私は断片的な話なのですが、推進ビジョンの 84 ページにレノファ山口に関連する重点プロジェクト 8 の中のプロスポーツ資源を活用した 21 地域でのスマート“ライフ”シティの推進ということで、レノファ山口のリソースを活用してということで、我々を、リソースを活用して、21 地域での推進していくという形になっている部分ですが、ちょっと今までお話したことと、ちょっと重複するかもしれませんが、念のためを含めて、お話をさせていただくと、若干、スポーツリソースを使ってというのは分かりやすいようで、分かりづらいところもあったりして、今、Ｊリーグ自体もＪリーグのリソースを使って、社会課題解決を、社会連携活動とか、やっているのですが、そうしたときに使われているリソースというのが何なのかというのが、選手だったり、マスコットだったり、はたまた試合に来られるお客様だったり、という分かりやすいものと、後それとは別に、スポーツ自体、これはレノファ山口に限らずなのですが、持っているワクワクする、ワクワクさせる力というのですか、していただく力とか、つないでいる力とか、そういった抽象的な力、遊び心、取り組むとか、そういったところにちょっと注目されている点を、今回、ワクワクしていただくというふうにとら

	えております。そういったことで、84 ページの下に書いてありますが、セッションの実施という言葉があったのです。参考の④のところ、各地域で、地域の方と、その理屈で言うと、企業さんのお力も連携の上、使いながら取組をしていくにあたって、材料の一つに、スポーツの先ほどのつなぐ力とかワクワクする力とか、というのを使ったワークショップ的なことをやっていくというようなお話ですよね。 　早速ここに書いてある、この 6 地域と書いてあるが、まずは吉敷地域で、21 地域のうちの一つの吉敷地域で、レノファ山口の先ほどのリソースを活用した地域の方と、企業さんと一緒に、地域をよくしていくというふうなことをワークショップをしながら、進めていくという流れ。ということを取り組んで、今すでに思います。進んでいくと思います。で、21 地域のうち、1 地域から横展開というか、6 地域にしていってというふうな方向で進んでいますので、ちょっと注目を是非しておいていただけると、と思います。重点プロジェクトのこれ、8 の 5 ですかね、8 の 5 だけではなくて、そういったことをつなぐ力と、ワクワクする力としかいいませんが、そういったものを使っていただいて、ほかのプロジェクトの中、推進していただけたらというふうに我々も思っております。そういったことをちょっと今、サッカー界も、全国的に、地域に対してバックアップしていっているという状況にあります、ということを報告申し上げて終わらせていただきます。よろしくお願いいたします。 【松野会長】 　はい、ありがとうございました。レノファ山口、最近社長が交代されて、というのはご存じだと、報道にありましたが、たぶん、社長の小山さんは、うちの人文学部の卒業生で、それでIT系の会社を起こされて成功されて、それで今、郷里の徳山の方に帰ってこられて、今度は社長に就任されたということで、この方もITに非常に詳しい方で、私も良く知っています。また心強い感じがするなと思います。では、次に鈴木委員、お願いします。 【鈴木委員】 　公共交通委員会、副委員長の鈴木です。概要版、本編の資料を見せていただいて、非常に全体の流れ、よくまとまっているなと思っております。それと、市民や社会のニーズを原点とする、その考え方、私も大変重要なことだと思っておりますので、このことに非常に、賛同しております。それからスマート“ライフ”シティという言葉はなかなかいい言葉だなと思っているところです。 　また、この流れの中でこう読んでいくと、そこここに、交通は大切だなと言ってくれているような気がしますので、これも非常にありがたいと思っているところです。それで、二つ気になっていることがありますので、それだけ申し上げておきたいと思います。 　一つ目は、非常にやはり、カタカナ、アルファベット、略語が多いということです。それは市民目線ということで見たときに、それは市民が本当に読んでくれるかなと思っ

	たときに、しょっぱなからカタカナが非常にたくさん出てくる。この時点で読むのをやめてしまうのではないかという気がしてしょうがない。ただ、本編の最後の方に、用語解説あるのですが、少しでも読んでもらおうとすれば、単純に技術的な問題なのですが、用語解説のところに発出のページを出すよりも、最初にその言葉が出てきたところに用語解説にこの中身の説明はありますよという表記か、あるいは最初のところに囲みかなんかで、この用語はこういう意味です、ということを出すか、何かそういうことでもしていかないと、ちょっとこれは一般市民が接したときになかなか読んでもらいにくいだろうなというふうに思っています。それが一点です。 　もう一点は、デジタル化そのものはもちろん、これからの潮流としても必要なことだとしても、確率はそんなに高くないと思うのですが、システムダウンをしてしまう恐れもかなりあると思うのですね。その時に、すべてをデジタルに頼っていくと、社会そのものがストップしてしまう、というようなおそれがかなりあって、このことについて、やはり考えておく必要があるのではないかと。ただこれも、こういう計画の中に織り込めるかというと、これもなかなか難しいだろうなと思うのですが、例えば、今までのご意見の中でも、例えば、大田委員の方から、アナログの基礎を大切にと言ったようなご意見であったり、永久委員の方から、アナログのいい所を活かすといったようなご意見もありました。それが非常に大切なことだと思っていて、そういったアナログの基礎になる部分であったり、あるいはアナログをきちんと活用できるような、あるいはアナログに戻れるようなという言い方が正しいかどうかわかりませんが、そういったことをやはり、バックグラウンドとして持っておく必要があるのかなと思っております。とにかく、そのシステムダウンが起こったとたんに社会の何もかもが動かなくなってしまう、市民生活が止まってしまうというようなことになってしまうと、これは逆に非常に大変なことですので、これに対するカタカナの言葉を使いますが、リダンダンシーだとか、そういったようなことは、どこかに記載をしたりしておく必要があるのかなというふうに考えているところです。 　その二つだけ気になりましたので、申し上げておきます。以上です。 【松野会長】 　ありがとうございます。次に兒玉委員お願いします。 【兒玉委員】 　医師会事務局の兒玉と申します。いろいろと協議会、お疲れでございました。皆様からのご意見が出ておりますし、それから、事務局の方でも、計画の方、ビジョンをまとめられて、大変お疲れでした。新型コロナの関係で、いろいろとオミクロン株が、かなり感染力が強いので、特に岩国等では蔓延している状況でして、これが今、下関、そういったところで、広がっているというところです。そういった中で、生活様式という形の中で、いろいろな生活のスタイルが変わってきつつあります。そういったところで、今、実は今、会長さんのほうからも話がありましたが、デジタルトランスフォーメー

	ション、何を目指すか、そういうようなことの中で、最終的には、そういったいろいろな生活様式が変革させていくと、そういったところがやはり最終的には目指していくべきところなのかと。今、市民生活の中で、いきなりこう変えていけというような形も、難しいところではありますが、そういったところの住民のメリットというのをしっかり示しながら、この計画の方を進めていく必要があるのかなと感じています。 　前回、私の方からも、分かりやすくした形の中で、市民に計画を見せていく必要があるというようなお話をさせていただきましたし、それから杉井先生、あるいは鈴木委員さんからお話がありましたが、そういう分かりやすくという形の中で、ペルソナ、特にペルソナの部分で、42 ページから 47 ページにありますが、将来像というものを付け加えていく形が、私はいいのではないかというふうに思っています。そういった将来像を付け加えていくことによって、市民生活がどう変わっていくかというようなところを付け加えていく必要があるかなというふうに思っているところです。 　それから、もう一つ、ペルソナの部分で、今、47 ページに全世帯を対象ということで、防災分野というのがあります。確かに防災分野については、こういうデジタルの部分、そういう部分の情報発信、情報教育というのは非常に大切なもので、こういうふうな形で、取り上げていくというのは、問題はないと思いますし、それからもう一つは医療福祉分野についても、今、ゆりかごから墓場までという形の中で、全世帯対象を目指している部分もありますし、高齢者福祉もありますし、それから介護サービス、そういった高齢者等の中でも、多少は出てきておりますが、そういった全世帯対象の中で医療福祉といったそういうところの分野についても取り上げていくような形で考えていただけるといいかなというふうに思っております。私の方からは以上です。ありがとうございました。 【松野会長】 　はい、どうもありがとうございました。次、高田委員、お願いします。 【高田委員】 　NPO 法人ほほえみの郷トイトイの高田です。私は阿東地域で活動している関係で、中山間地域においてのスマートシティの推進というのは、非常に興味もありますし、勉強もさせてもらっています。推進ビジョンについては非常によく作られているなというふうに、全体的に思っています。少しだけ中山間地域の視点で、ご意見を述べさせていただくと、最初に松野先生からもありましたが、技術の導入から考えるのではなくて、市民の社会のニーズを基にというのは、特に中山間地域ではよく感じています。高齢者と一口に言っても、結構幅が広くて、まだまだ元気で地域の役に立ちたい、活躍したいという高齢者もおられれば、本当に地域に支えられて何とか最後まで、住み慣れたところで暮らしたいという高齢者もおられます。そのあたりがちょっとペルソナをどこまでやるのかというのはありますが、ちょっとイメージ付けが、中山間地域の視点から見ると、高齢者の幅が広いので、もう少し、僕らもいろいろ地域で活

	動している中で、その地域でどのように人生を送っていくかというストーリーがやっぱり誰にもあると思っていて、元気な時からそうでない最後の時まで、地域でどのように暮らしていくかというのをこれからの社会、特にスマートシティを推進する中で、デジタル技術の恩恵を高齢者の皆さんも受けられるところは受けていただきながら、無理して、それを使うことがストレスになるという必要もないかなと思いながら、そういうふうに、こういう形だと幸せに暮らせるのではないですかというような形で、ビジョンはビジョンとして実際に実践していく中で、皆さんに伝えていくことがすごく必要かなと。 　人材育成のところでもいろいろありますが、私は一つだけ、お願いというか、特に山間部だと、最後のところは人と人になってくる。先ほど、会田委員さんからもありましたが、こういうものを進めていくのに、人が手をかけて、手間をかけて、丁寧にやっていかなければ、いくらいいビジョンを持っていても、それが浸透していきにくいと。当然地域の私たちも、地域づくりの観点で、地域の皆さんにアプローチしていくのですが、市役所の、例えば阿東地域の出先の職員の方とか、そこまでこれはたぶん企画経営課の皆さんがビジョンを作られて、市長さんを中心に、やられていく中で、市役所の職員、たくさんおられるじゃないですか。その末端にまで、こういうふうにして、山口市を都市核も中山間地域もみんなが暮らしやすいように進めていくのだと、職員の皆さんがしっかり認識していただいて、やっぱり最後は人だと思うので、特に出先に来ておられる職員の方が、丁寧に高齢者の皆さんに説明したり、寄り添ったりというような体制づくりを一緒に考えていただけると地域の高齢者の皆さんも安心して、この市の進めるスマートシティ推進ビジョンに沿って自分たちの暮らしが少しずつ良くなっていく、幸せになっていくという感覚を持っていただけるのかなと思っております。当然、行政の方たちだけで、できることでもないですし、民間の事業者さん、それから地域の一人一人が一緒になって進めていくことがすごく必要かなと思っています。できることは地域でしっかりやらせていただこうと思いますし、行政の皆さんと一緒に、是非、目指すところはたぶん、一緒だと思います。地域の皆さんが安心して、暮らしていけるということを目指したいと思っていますので、是非この、しっかり議論をされて作られた推進ビジョンを、どのように進めていくかという体制づくりを合わせて考えていただいて、地域の方でこれをやってほしいということがあれば、是非お声がけいただければと思います。一緒になって、地域の高齢者の皆さんに安心して暮らしてもらいたいなという思いがありますので、是非、今日来られている民間事業者の方も含めて、中山間地域をどうしていくかというのは、山口市だけでなく、山口県も、日本という国もたくさんある課題だと思いますので、是非山口がそれを引っ張っていけるような形になればいいなと思います。以上です。 【松野会長】 　どうもありがとうございます。次、藤井委員お願いいたします。 【藤井委員】

	NPO 法人あっとの藤井です。素晴らしいプロジェクトの実行がすごく楽しみだなと思っているところですが、私からは 2 点です。 資料 3 のペルソナの漫画にされたところですが、漫画にすることでとてもイメージがしやすいので、ここだけ見る市民の方、若い世代の方、多いのではないかなと思いました。ただ漫画にすることで、より忠実に再現しないと、いや違うし、となっていく人多いのかなと思うページが、45 ページです。子育て世代の夫婦の、共働きでの、子育て世代のところで、ちょっとお伝えさせてもらうのが、まず、夫が 31、奥さん 30、小学生に通う息子 6 才、24 で結婚しているわけですね。そんな人最近いないです。ご存じですかね。第 2 児の出産する年齢、平均 30 になっているのですよ。そこからもう市民目線でないなと思う。そして夜の行動を見てください。共働きの夫婦がオンラインでママ友と情報交換と、そんな余裕がある人見たことがないのです。夜は怒涛の寝かしつけ、掃除です。そういったことを自動でするようになったからオンラインによる交換ができるようになりましたとか、そこは全く市民目線でない。そしてもう一つ時代とあっていないのはママ友という言い方。最近はパパも同じように子育てをします。悩みを共有するのはママだけでなく、パパ同士もある。その表記を変える。子育て仲間じゃないかなということ。そして最後に指摘したいのは、一番最後に三人目の子どもを考えようかなと思っている、なのですが、数字が分からないので、申し訳ないのですが、夫婦に一人の子どもというのがスタンダードになっていて、二人目を考えるのが大きなハードルなのです。三人目は二人目生んで、やっぱり子供は多くてよかったなと、じゃあ 3 人目も、なのです。と考えるとここって三人目というのは、ちょっと古いのかなと思います。そういったところ、すべてにおいて、漫画にすることで、44 ページのミドル世代もそうですが、休日ですね、(スマホ)1 つで県内旅行とあるのですが、17 歳の息子、13 歳の家族で、県内旅行というのもあまりないですし、お金もかかる世代です。なかなかそこも現実的でないのかなというところが 1 点です。 そしてもう一点、このペルソナの漫画でいうと、47 ページの災害のところを見ていると、こうなったらすごくありがたいなと思って、本当にすばらしいプロジェクトになってくるのだと思ったのですが、ここはお尋ねに近い所なのですが、今は交流センターも Wi-Fi なんかもつながりにくいですし、遅いのです。家が停電になった場合、Wi-Fi がつながらなくなったと想定すると、キャリアの回線に切り替わると。みんながキャリアの回線を使うから、つながりにくいと。交流センターに避難しても遅いと。この辺のところの Wi-Fi の整備は市としてこれからのどういう強化していく予定というのはあるのかなというのは、一市民として、不安なところかなと思って、お尋ねしたいなと思いました。以上です。 【松野会長】 事務局の方、今の質問に対しての回答をお願いします。 【事務局】

	今のお尋ねの件につきましては、今後、各地域交流センターに公衆無線 LAN、いわゆる Wi-Fi ですね、これをまた改めて整備をしていく予定にしております。実際には通信速度がかなり遅いというご指摘がありましたが、確かに今、最低ランクの契約内容でして、それではやっぱり、市民の使い勝手にもなかなか納得していただけないような環境ですので、来年度、そういった整備を進めていきたいと考えております。以上です。 【松野会長】 ついでに Wi-Fi もデータが取れますので、かなり重要なデータになりますから、その辺も活用できるようにというのも導入されると、ぜひ考えていただければと思います。では以上で委員の方々が終わりました。オブザーバーの方からもご意見をいただきたいと思います。名簿の順で、お願いしたいと思います。まず、田中さんからお願いします。 【田中オブザーバー】 はい、田中です。まずは、この推進協議会を含めて、この推進ビジョンですね。作成にあたってかなりご準備されたなと思います。ありがとうございます。これをベースに進めていくことで、山口市でも進んでいく形ができるのではないかなというふうに思います。私からは実際これを進めていくにあたってというところで、2 点ほど。 1 点目なのですが、今後その、デジタルを活用して色々な市民サービスを作っていきますという形になっていこうかと思います。で、もう皆さまご承知の通りだと思うのですが、今のこのサービス、通常はいろいろなシステムを構築するときって、こういうサービス、中身を提供しますという形にやってきていると思うのですが、今、アジャイルと言われていますが、要はサービスが提供した時点がスタートラインという形のものが、意識していかないといけないかなと思います。なので、実際にその市民に対してサービスを提供し始めて、それからどう改善していけるか、市民の方々にとって、使いやすいものにしていくか、どう改善していくか。多分、今まで、そのいろいろなシステムとかを提供していたやり方とは変わってきている部分だと思うので、その辺も意識しながら進めていかないといけないと思っております。その辺を考慮いただければなというふうに思っています。 あと 2 点目は、中川委員の方からもありましたが、スマートシティを進めていく部分については、市だけではなくて、やはり他の自治体で、県の方もデジタルプラットフォームという形でなお整備をして、活用というところを進めているところですので、その辺について、より連携して情報もうまく活用しながら、より市民なり、市外の方、県外の方に対しても、活用ができるようなところまで、発展していければいいかなと思っております。それに向けては、いろいろと DX を進めていく中で、リソースとかありますので、その辺については、いろいろとご相談させていただきながら、より山口市にとってよりよいサービスを提供できるように、一緒に検討させていただければと思っておりま

	ので、よろしくお願いいたします。私からは以上です。 【松野会長】 　どうもありがとうございます。それでは、松田さんお願いします。 【松田オブザーバー】 　はい、松田です。聞こえますでしょうか。今日は、ありがとうございました。 　私の問題意識についてちょっと話したいと思います。供給者主語から、住民主語へということで、こんなスマートシティにご用心ということで、スマート“ライフ”シティが大事だということです。主語は住民主語ということで、この報告で反映されていると思いました。後は山口らしさの訴求をもっとしてはということです。報告書を見ると、どこの自治体か正直分からない。もっと言えば山口らしさを訴求したほうが良い。後、これからは山口市民への丁寧な合意形成が必要だということです。多くの自治体を見ている中で、こんなスマートシティにご用心というものがあります。これは日経グローカルに連載したものですが、ベンダー主語になっていませんか、スマートシティを作ることが目的化されていませんか、ゴールがハイテクの見本市になっていませんか、カタカナの専門用語が氾濫していませんか、住民参加、不在ではないですか、実証実験が野ざらしになる可能性はありませんか、アメリカではとかヨーロッパではとか、ではの神になっていませんか、あとこれは何のためにやっているのだっけ、これは縦割りの連鎖、不能になっていませんか、ということを気を付けましょうということです。えてして陥りがちです。ポイントはスマートになるのはまちではなく、住民の暮らしだからスマート“ライフ”シティ。さらにその実現はハイテクでもローテクでもいいということです。デジタルありきじゃなくて、アナログの活用も大事。そして行政、住民、産業の三方良しという。でも多くの自治体では、三方良しでなく、三方総対峙になっているとか。これは、住民はこれでどんなメリットがあるかよく分からない。行政は雇用が増えるのですか、税収が増えるのですか。地元の産業は仕事が増えるの、結局大手の下請けではないのかという思いになる。これを三方良しにしましょうということです。循環しないスマートシティというのは国の事業が始まって、都市OSを作ることが目的化されて循環しない。循環するスマート“ライフ”シティは住民参加します、そして仕掛けと投資がうまく回ります、ということです。特に投資で言うと今後、発射台として補助金を必要なのだけれども、将来補助金に依存しないモデルを次年度考えたらどうでしょうか。企業の内部留保 500 兆円もあります。個人の金融資産、2000 兆円もあります。ヒントとしては、長野の松本信用金庫がやったこと。健康診断を受ければ預金金利が 10 倍になるという商品をしたら、今まで懸賞金を受けなかった人が続々と受けて、12 億円の大ヒットになったということ。そうすれば、組織をもってして、補助金に依存せず、地域のスマート“ライフ”シティに投融資できると。それが三方良しになるし、住民の体も安心、お金も安心、心の安心。まとめということですが、こんなスマートシティにご用心という先ほどの困った手法に注意しないといけない。それから住民行政企業が三方

	良しにならなければいけない。さらに山口らしさの訴求、これからは市民に丁寧に丁寧にデジタルを使ってアナログを使って、手を変え品を変え、合意形成をしないといけない。それをするのは行政のアプローチ、企業のアプローチ、大学のアプローチ、住民同士のアプローチということが必要ですということです。オブザーバーとして、最後に私の意見を報告させていただきました。どうも長期間、事務局の方、委員の方、本当にお疲れさまでした。 【松野会長】 　どうもありがとうございました。続いて須原さんからお願いします。 【須原オブザーバー】 　はい、ありがとうございます。本当にこちらの方に来させていただいて、県外の人間だからこそ、先ほどまさに松田様がおっしゃったように、山口らしさ、山口の良さというのを本当に実感させていただきました。 　すでにちょっとスマートシティ推進委員会の方々の方には、私、14 ページくらい、A4 で 14 ページくらいのご提案書みたいなのを送ったのですが、あまり時間をかからないように、かいつまんで、その辺のポイントを一つ一つお話させていただきたいと思います。 　まずですね、まず全体のビジョン策定の背景、Ｉの1の時代の潮流というところですが、こちらの方人口の減少、少子高齢化の進展、人生 120 年の到来、働き方暮らしへの意識変化、深刻化する気候変動と脱炭素への指向とあります。こちらの内容、すべて正しいものかと存じます。ただそれは日本の政府の資料を基にした場合と言った形かなと。なぜ今、日本は遅れているのかというと、いわゆるグローバルトレンドの中からある意味、孤立化したか、ではないか。あくまでもドメスティック、国内の視点だけで作っていくと 10 年前、20 年前に作ったものというのが今、動かなかったと同じように、10 年後、20 年後、動かなくなるのではないかと。これも私、一方的な片思いなのですが、長州藩が日本を作ったと私は信じていますので、特に山口市には山口大学という素晴らしい大学があり、こちらの方に、杉井先生なんかもいらっしゃる国際総合科学部なんかもありますので、是非とも私、各基礎自治体、先週まで、秋田県のお手伝いをさせていただいたのですが、まさに松田さんがおっしゃったようにどこも同じというのではなく、ここだけは世界からの視点でというのを是非山口発信で出していただけたらすごくうれしいなと思っている次第です。 　次、国の動向として、地方創成の推進とか、ソサエティ 5.0 とかデジタル化の推進というのがあります。こちらの方も順番だと思うのですが、これはたぶん、過去発表された年表順になっているような気がします。そうすると、読んだ段階から確かに歴史はわかるのですが、おそらく今一番新しいものから入っていくような形で、逆落としでやっていったほうが、より分かりやすいのではないかなと思いました。デジタル田園都市国家の方の、構想策定の、2 年位前から若干関わらせていただいています。なので、

	こちらの方が最新なので、そこから落としていく。後ですね私、すごくちょっとこれは山口さんに是非ともやっていただきたいなというのが、地方創成の推進の地方という言葉、東京が中心で、他がサブという感覚ですね。これは今後変えていくようなことではないかと。僕だったら分散型社会の創成と地域社会の活性化をします。 デジタル田園都市構想の中で、是非ともみていただきたいところというのが、自助と公助というところの図があります。自助、共助、公助と形が変わっていますが、あくまでも官が民を支えるみたいな図になっているので、そういったところも色々出していただけたらと。 あと、4と5の SDGsと脱炭素社会の方は、山口大学さんの方が、グリーン社会研究会を立ち上げられた。私も入らせていただいていますが、こちらの方も全面的に出して、そうすると、先ほど松田さんのおっしゃっていました、山口らしさというのが出てくるのかなというふうに感じております。 3 番の県の動向なのですが、ちょっと 1 枚で、たぶんこれからも同じものだと信じております。私、山口デジタル改革基本方針案令和 3 年 2 月山口県というのを拝見させていただいて、かなりいいことが書いてあるなと僕は思いました。目指すべき将来像として、産業維新、大交流維新、生活維新、そして交通という形で出していると、ことどう山口市は連携するのかなというのが興味深く思っていたところです。 それと県の方が面白いなと思ったのは、一番最後の付録にサービス設計 12 か条というのがあります。ここってかなりいいなと思っているのが、1 条、第1、利用者のニーズから出発する、2事実を詳細に把握する、3エンドツーエンドで考える、4全ての関係者に気を配る、5サービスはシンプルにする、6デジタル技術を活用しサービスの価値を高める、7利用者の日常体験に溶け込む、8自分で作りすぎない、9オープンにサービスを作る、10何度も繰り返す、11一遍にやらず、一貫してやる、12情報システムではなくサービスを作る、というようなことを書かれていることもあるので、こういったものも市民の方とも共有して、たぶんググって探さないと読めないものだと思うので、是非とも山口市としても連携してできたらうれしいな、というふうに感じました。 セクション 4 の本市の現状と課題の部分ですが、(1)と(2)のところですが、こちらも統計資料なので、こちらの方は後ろの付録でもよいのかなと。逆にそこは解釈を載せていただいて、(3)の本市の都市政策及び都市構造であったりとか、目指すべき都市構造というのを、より文書として書いていただいたらなと。そうした場合、都市の拠点と地域の拠点、生活拠点とを兼ねているので、特に私、載せていただいてうれしいなと思ったのが、オール山口の発展というところの絵柄です。こちら大人の事情があり、本来ですと山口市は防府さんだとか、宇部さんだとかと一緒というか、合同で動ければ本当は生活圏としてあっているなと思うのです。これは去年、市役所などと共演しましたが、竹中平蔵教授と直接お会いして、話させていただいたときに、彼自身がスーパーシティー構想と、複数のスマートシティを基礎自治体の枠を超えてつなげるからスーパーという単語を使ったのですが、結局は基礎自治体の中で、こじんまりとやって、先ほど、松田様がおっしゃったデジタル消費展示会になってしまったと、非常に

	残念だという話をされていたので、そういった意味でも、この図というのも、より県の方と連携して、何かできたらなと思っております。まさに、レノファ山口と一緒につなげて、括れるかなと思いました。次、(4)の本市における分野別の現状と課題の整理として、①から⑩、交通からDX社会基盤とあります。こちらの方ですが、ちょっと私の方で、粒度とか合わせていただいて、ちょっと考えて、たぶん(1)地域づくりを先に持ってきたほうがいいのかなと①が。で、そこに大体⑤豊かに暮らせる持続可能なまちというところが、次にDX社会基盤、二つに分けられたほうがいいのじゃないかなと。まずは、人材育成、DX人材の育成というのがないと、何をやっても、無理なのかなと。次、教育できるのも分けて、そこに幼稚園、小学校、高校、大学、成人とシニアの教育、次に4ヘルスケア、医療を加えた、5子育て、これは別腹だと思っております。6交通と移動、7防犯と防災、8に産業にしておいて、アイウみたいな感じで、農業、工業、サービス業をと分けておいた上で、サービス業に至る、観光と文化とスポーツというのはまたサブカテゴリーに分けられるのではないかと。で、あとは、環境、エネルギー、脱炭素、で後は行政で、最後にDX社会基盤のデータ連携基盤と。なぜかというと、上のデータがないと、連携するものが何もないのではないかというところがあるので、そういった流れにして、たぶん、これをまた後で後ほど言いますが、ペルソナの方の中での協議の対象にして、横断的にしていただけたらなというふうに思っていました。で、Ⅱの間、大きなⅡの推進ビジョン、こちらはなかなかうれしくなるような、ワクワクする様なところです。こちらの方は、メモで書きましたので、そちらの方見ていただければと。 　で、後は、ライフを守るということで、3つのライフ、こちらの方の指標なのですが、いろいろもっとほかにもあるのではないかな、というところがあったので、感想として、例えば、幸福度調査の事例であったりとか、後は大東建託さんがまちの幸福度と住みやすいランキングというのを全国規模の市町村で作られて、そういうところも混ぜ混ぜでやってみても面白いのかなと思いました。後はビジョンの位置付けというのは、これはなかなか面白いと思います。 　で、ただ次に出てくる基本の目標というのは、1、2、3、4と出ていますね。それと次の4の目指すまちの姿のところの重点項目につながるところの流れが、ちょっと思考が止まったかなと思いました。後、参考として、先ほど藤井さんがおっしゃったように、漫画、すごくわかりやすいのですが、ちょっと内容を変えたほうがいいかなというのと、1、2、3、4、5、6のとこまでは良くて、次にあと二つくらい、山口で成長する小中高校生というようなところを、含めるということ。先ほど、杉井先生がおっしゃったように、山口で働く歴史の方々というところをやって、このペルソナの文化財、こういった形で作るのを、去年、YCAMで未来の教室というのをやられていて、これは会田さんが主体で、後は会田さんの仲間がやられていたのですが、とてもいい取り組みだなと思っていました。単に展示をするだけでなく、コミュニティを招いて、マジに3週間に分けて、ディスカッションをしていたのですね。実はトイトイの高田さんも入っていたのですね。いろいろやられていたので、あんなきれいなかっこいいスペースがあって、そういったことを実際やられているので、ペルソナの協議とかというのに、あのYCAMの場所を

	使って、この前やられていた未来の教室みたいな形でいろいろやってみるというのが、先ほどまさに松田先生がおっしゃっていた、より住民の目線でディスカッションを深めていくといった、YCAMというのは市の財産だと思っていて、そういった活用の仕方というのができたらなと思いました。後、5 のDXの考え方、これも素晴らしいなと思いました。①、②、③のデジタライゼーションと、デジタルトランスフォーメーション。こちらをもうちょっと、やっぱり分かりやすい言葉に言い換える、もしくは事例をもう少し、国が作ったものでなくて、山口っぽく変えていっていくと、皆さんの心に響くのではないかなと思いました。ビジョン推進体制に関しては、ちょっと長く話しました通りのちょっと議論を踏まえたうえで、ペルソナ設定して推進体制を作ると。で、官民データの活用の連携等に関しましてなのですが、こちら(5)のセキュリティ及び個人情報の適正な取扱いは、ちょっと独立させてもう少し、他に深めたほうが、かなり杉井教授がおっしゃったように、ここ肝だと思っていて、後みんな怖いのですよね。要するに、ここがしっかりしているよ、山口ばっちりだよと。実はエストニア、デジタル国家と言われていますが、2008 年にロシアさんからデジタルテロ…。そこでNATO北大西洋条約機構、軍事同盟のところのバリバリのセキュリティをくっつけて、それでも、我慢できない、信じられないといって、改ざんしたらわかるようにというので、ブロックチェーンを発明して、とやってから、今に至るという所なので、ここのあたりの安心度というのを前面に出さないと、やっぱりデジタル慣れしていないというのは怖いかなと思いました。長くなりましたが、最後にこちら、濱田委員がおっしゃっていたように、産学官連携という言葉なのですが、こちら、僕の個人的な過去の経験で、私はシリコンバレーというところに 95 年から 2002 年におりまして、後は上海というところと、天津のスマートシティというところに 2005 年から 2010 年まで、後はエストニアの…。大学が中心です。やっぱりシリコンバレーというと、バークレー、スタンフォード、ロサンゼルスだったらというのとUSEのUCLA、でエストニアのタリン工科大学であったりとか、上海なら上海交通大学、復旦大学、というところの、面白い学生とか面白い教授がいて、まちの実業家がそのアイデアをつまみ食いをするのですね。つまみ食いをして新しい事業をやっていくときに官の方が、意思を向けてくれるとみたいなところで進んでいると思うので、学産官の連携で、語順をちょっと変えるような形がいいのではないかなと。後、会田委員がおしゃったようにラストワンマイルなのですが、これ良く話しているのですが、最後は学生のボランティアです。デジタルバス、IT バスというのを作って、おじいちゃん、おばあちゃんに一つ一つ教えていくというのを地道にやったのよと言うのをおっしゃっていたので、こういった面でも、学産官ではありませんが、せっかく学園都市山口だと思うのですね。国立大学あり、県大あり、芸術大あり、いろいろなのがあるので、そういったところの人たちと一緒に連携ができればというところ。 　後、そういった面も含めまして最後のお知らせで、前回の 10 月にお約束した通りに、IT 企業を濱田さんの口からもいただいて、仲間と一緒にメグリバで作りました。こちらの方、私の方、青山学院の学生、及び近畿大学の学生さんと一緒に学生起業みたいな形でやり、メインバンクは山口銀行山口支店、後は先週の火水から松野教授と

	か、山口大学の教授を口説いて、是非とも山口大学の学生さんにも入っていただいてということをやると。やってみて分かったのですが、山口銀行に銀行口座を作る時に、メグリバの住所は長すぎてシステムに入らないとか、やってみないと分からないことがいろいろあるということがあったので、こういった形でとにかく山口もやるということで、今後ともちょっと一緒にいろいろやらせていただたいと思います。以上です。長くなりました。 【松野会長】 　どうもありがとうございます。最後に財間さん、お願いいたします。 【財間オブザーバー】 　時間も迫ってきましたので、ちょっとまず、全体的な印象から行きますと、誰に読んでもらいたいのかというところ、作りこみが弱いかなと思っています。どなたか委員からもあったと思いますが、特に前半ですね、中学生とか高校生、将来を担う若い世代が読んで、ちゃんとわかるような文章にしていただきたいなと思います。細かい言葉遣いだとか、繰り返しになっている表現とか、また別途事務局の方に、ご相談、確認をさせていただければと思います。できれば、読んで、中学生、高校生がワクワクするような形の内容、アピールができるといいなと思うものの、それはちょっと難しいかもしれません。 　個別に少し入りますと、前段の部分でいうと、まず目指すまちの姿のところで、35ページですが、四角で囲んでいて、スマート“ライフ”シティ山口を目指すということで、非常にいいのですが、その下が、デジタル、デジタルといって、デジタルスタートになっているので、山口らしさとか、そういう意味合い、あるいは議論に出ていたアナログの大事さだとか、そういう話もあると思いますので、私もこの席で確か以前、阿東の中高生が地元のおじさん、おばさん、あるいはおじいちゃんたち、背中を見て育って格好いいと思っている、尊敬しているという発言があったというのをご紹介したと思うのですが、そういう所を、しっかり、まずそういうベースがあってこそ、デジタルを活かしてさらにスマートライフなまちを目指すのだというところにつなげるような、ここにもう少し入り口を、技術から離したほうがいいのではないかなという印象。 　そして二つ目が、ペルソナのことですが、分かりやすいと言えば分かりやすいのですが、申し訳ないのですが、読んでいて今、プラスアルファ程度になっていて、ワクワク感がないのですね。あともう一つは、スマホ、スマホが連発していて、結局スマホがないと何もできないのかという印象になってしまうので、手ぶらで、スマホで買い物をするのではなくて、手ぶらで買い物をするのか、そのくらいまで行っていいのではないのですかと。もう一歩、二歩、先行してもいいのではないかなと思います。細かいですが、鈴木さんとか藤井さんとか、しなくてもいいのではないかなという印象を受けました。前半の部分で、最後はDXの定義のところなのですが、技術先行はだめよというのは、非常によくわかります。その通りですし、それが今回のビジョン、一本筋を通りし

	ていると思うのですが、おなじことを言っていると思うのですが、最後、四角の定義の中の最後の終わり方が、生活の質を向上させることと、終わるので、DX の定義が生活の質を向上させることになってしまう。生活の質を向上させることを目的に市民サービスを変革したり、組織文化、風土を変革するという、変革の部分が DX だと思うので、同じことを言っていると思うのですが、ちょっと順番を逆にしたほうが、よりビジョンの中で使っている DX というワーディングの使い方としては、そちらのほうが分かりやすいかなというふうに思いました。 　最後、後半部分の重点施策のところですが、重点プロジェクトの1にあるステップ1、2、3ですね。61 ページの、ステップ1、2、3がたぶんデジタイゼーション、デジタライゼーション、デジタルトランスフォーメーションにちょっとニアリーだと思うのですが、このステップ1、2、3の書き方、非常に分かりやすいので、できれば間に合えば、重点プロジェクト 2 以降のすべての重点プロジェクトに、このステップ1、2、3、デジタイゼーション、デジタライゼーション、デジタルトランスフォーメーションを意識した、ステップというのを書けないかなというふうに思いました。これが最後になりますが、活動指標のところですが、これ、結局供給者側の指標になっていて、要は縦割りと講座を開催しますと、講座の開催数になっているのですね。そうでなくて、講座の参加した人の数だと思うし、あるいは高齢者のためにやるのであれば、参加者数×データとか、あるいは交通機関の話であれば、年齢×移動距離だとか、そういうところを数値化して、それを指標に設けるとか、そういう市民目線であれば、評価も市民側がどれだけ使ったか、使ってないか、生活にプラスになったかなっていないか、という考え方だと思うので、若干指標の設け方がまだ供給者目線になっているかなという印象ですね。本当の最後で、資料 2 の概要ですが、今の活動指標について、毎年見直しを行って、重点プロジェクトの具体施策については見直しをするというような、PDCA のサイクルを回しますというところをどこかに一言入れておかれたほうがいいかなと思います。はい、以上です。 【松野会長】 　はい、どうもありがとうございました。以上で、今日ご参加されている方からご意見等をいただきました。何か全体のことで何かありますか。はい、杉井委員。 【A 委員】 　すいません。1 点だけ。皆さんのご意見の中から、人材育成という言葉が沢山出てきましたので、委員としてよりは、山口大学の教員として少しコメントをさせていただきたいのですが。私が考えるスマートシティ、スマート機器とか、これ何かと考えたら、他の機器との違いとして、利用者が意識せずに使える、便利にというのを私、考えていて、先ほどから使いやすいとか、いう話がよく出てきたと思うのですが、使いやすいということを考えてきたとき、技術者目線だけではまずかろうと思っていまして、我々今、人文社会学というところの知識をこのデジタル化に使えないだろうか、いや、使わ

	ないといけないだろうと考えていまして、我々山口大学には創成科学研究科という、理工系の大学院があるのですが、それだけではなくて、人文知、これまでの人文知を使って、いかに人に使いやすいか、それから人が意識せずに使えるか、というところを検討する、そういう政策も作れるような人材を輩出しようとして、今計画を立てているところです。 　ですので、我々山口大学としても、このスマートシティ推進に対して、技術的な側面と、さらに利用者目線でどう考えていけばいいのかという専門家を育てようとしているところです。ぜひ、一緒にこういうところに実際輩出できたらいいなというふうに考えています。以上です。 【松野会長】 　はい、私からも、是非山口大学ちょっとこれからも取り組んでいただければと思います。ほかに何か。 【B アドバイザー】 　大阪府の豊能町での経験談なのですが、1 万 9 千人のまちです。そこを束ねている町役所さんとやっています。いつも会議で話してくださいっている方とだけコミュニケーションをとればいいのではなく、各担当部局の担当者、本当に現場の窓口の人たちとコミュニケーションすごく重要だなということをひしひしと感じました。昨日僕、山口市の定住促進課とか、教育委員会はすごく好印象でした。ああいった人たちが、たぶん、YCAM でやっていた未来の教室みたいなところに出ていっていただいて、例えば子育てのセクションで実際に定住促進課と、教育委員会とかその若手の職員さんが一緒に入っていって、担当部局が窓口を知っているという状態で物事が進んでいくということの重要さというのを、ほかの基礎自治体のプロジェクトで痛い目を受けたので、是非とも山口市では、お願いしたいと思っています。以上です。 【松野会長】 　他に何かありますでしょうか。 【C 委員】 　今日はこの会議が終わりだという話で、私もこの会議に参加して、8 回参加させていただいたと思うのですが、私は正直何を議論してきたのだろうと思ってしまいます。こういう形で出来上がってきているのですが、ここへ参加しているメンバーもそうですし、正直やっぱり市民の意見というのがどこに出ているのだろうというのが非常に疑問になりました。というかそこは大事に今後もしていただきたいし、なにかそういうコミュニケーションという、市民のコミュニケーションもこの中に出ていけるようなことも考えていただけたらと思います。使うのは市民なので、と思います。

	【松野会長】 　他に何かありますでしょうか。特になければこれで閉会といたしますが、よろしいですか。長時間ありがとうございました。今最後にいただいた意見も、委員さんからも意見もありましたし、またこれ最後のところにまた、反映させて、ファイナルのやつを作っていくという作業をまた、最後の工程になると思います。3月にはまたできるということで、後はまたこちらの方にも共有していただければと思います。それでは、これで進行を事務局の方にお返しします。 【事務局】 　はい、皆様には長時間にわたりまして、協議いただきまして、大変ありがとうございました。また本日の会議の場で、発言しきれなかったご意見、ご質問がありましたら、お手元の資料などの意見書をご検討いただきまして、ご提出いただければと思っております。よろしくお願いいたします。 　本日の協議会を持ちまして、スマートシティ推進ビジョンに関する協議につきましては終了となります。委員の皆様におかれましては、ご多用の中、一昨年の９月から約１年半という長期にわたり、ご協議いただき、誠にありがとうございました。また今後につきましては本協議会において重点プロジェクトの具体化に向けた検討や見直し等を行ってまいるところです。引き続き委員の皆様、オブザーバーの皆様にはご協力いただけますよう、重ねてお願い申し上げます。以上を持ちまして、第８回山口市スマートシティ推進協議会を終了させていただきます。貴重なご意見、ありがとうございました。 <u>4　閉会</u>
配布資料	次第 　資料 1　山口市スマートシティ推進ビジョン（山口市官民データ活用推進計画）の策定について 　資料2　山口市スマートシティ推進ビジョン（山口市官民データ活用推進計画）（最終案）【概要版】 　資料3　山口市スマートシティ推進ビジョン（山口市官民データ活用推進計画）（最終案） 　資料4　第2期山口市まち・ひと・しごと創生総合戦略の進捗状況について 　資料5　委員名簿 　資料6　配席図 　資料7　意見書
問い合わせ先	総合政策部　スマートシティ推進室 　TEL　083－934－2728